専修人文論集97号
275-300，2015

『天の牧場』論

――アメリカの縮図としてのコミュニティ

大須賀　寿子*

ジョン・スタインベック（John Steinbeck）の『天の牧場』（*The Pastures of Heaven*）[注1]は1932年に刊行された。彼は1929年に『黄金の杯』（*Cup of Gold*）で文壇にデビューを飾り，『天の牧場』に続いて，そして翌年には『知られざる神に』（*To a God Unknown*）を発表した。[注2]　この３作品はスタインベックの作家としてのスタートを飾る作品であるが，実在の海賊であるヘンリー・モーガン（Henry　Morgan）を主人公としたロマンス譚の『黄金の杯』はヒット作と呼ぶには程遠く，作家として名を知られるようになったきっかけは，『天の牧場』と『知られざる神に』の両作品である。[注3]「こうした第１作の失敗と青春時代の都会での挫折は，スタインベックの作家としての方向性を変えさせたのである。まず，遠く離れた都会ではなく，足元のカリフォルニアの自然と社会を舞台にしたことと，次に東部や南部のような人種差別の形態ではなく，アジアの移民も含めた様々な人種の混合世界に目を向けたこと，そしてそこで生き抜く人々の赤裸々な実態を『天の牧場』に反映させたのである。」（11）という西村千稔による分析が，２作目以降の成功の理由を的確に物語っている。

『天の牧場』の構成はショート・ストーリー・サイクル（Short-Story Cycle）と呼ばれる。それはシャーウッド・アンダーソン（Sherwood Anderson）が『ワインズバーグ・オハイオ』（*Winesburg Ohio*，1919）で実践したように，個々の短編で構成されながらも，ストーリーの軸となる人物を

＊専修大学経営学部兼任講師

各章に登場させ，作品を個々の短編の寄せ集めではなく，完全な１つの作品とみなされるようにする方法である。この作品におけるショート・ストーリー・サイクルの効果について，“The artistic challenge of the short-story cycle is always unity, some means of relating one story to another, making the whole greater than the sum of its parts.”(xviii)と，James Nagel が的確に表現している。[注4]　さらに，中山喜代市は『天の牧場』の作品の構成について，「スタインベックが作品の全体性を強調するため，『ワインズバーグ・オハイオ』や『ダブリン市民』とは異なり，各章には数字だけを与え，表題をつけていないことに注目する必要があろう。また第１章と第12章（最終章）をそれぞれ，プロローグ，エピローグの機能をもたせ，全体を１つの小説にまとめるように工夫していることも見逃せない」(52)と説明している。そして，スタインベック自身も１つのストーリーとして『天の牧場』をみなしていることは1931年12月のアマサ・ミラー（Amasa Miller）宛ての手紙ではっきりと書かれている。

> If the reader will take them for what they are, and will not be governed by what a short story should be (for they are not short stories at all, but tiny novels) then they should be charming, but if they are judged by the formal short story, they are lost before they ever start. I am extremely anxious to hear the judgement because of anything I have ever tried. I am fondest of these and more closely tied to them. There is no grand writing nor any grand theme, but I love the stories very much.(*A Life in Letters*, 51-52)

さらに，この引用から，スタインベックが『天の牧場』に対して大きな愛情や自信を抱いていることがわかる。この作品は彼が生まれ育ったカリフォルニアを舞台にしていることもその理由の１つである。そして，最も

注目しなくてはならないことは，普通の人々の生活のなかに，作中に書かれる年からも明らかなように建国当時からのアメリカの歴史，伝統や精神性，特に，法，教育，農業を重んじるトーマス・ジェファーソン（Thomas Jefferson）の思想が反映されていることである。換言すると，この作品の舞台となっている土地，表題と同じ名前の「天の牧場」（The Pastures of Heaven，スペイン語では Las Pasturas del Ciero という。しかし，実際には，Corral de Tierra と呼ばれていた。[注5]）という土地そのものがアメリカ合衆国の縮図であり，そこに生きている人々の姿にアメリカたらしめるものを私たちは垣間見ることができるのではないのだろうか。

本稿において，アメリカの縮図として描かれている『天の牧場』に着目して，土地との関わりを中心に考察し，あわせて『天の牧場』が描きだしていることがアメリカの歴史の語り直しであり，現代のアメリカにもどのようにかかわってくるのかも考察する。

1　『天の牧場』の構成について

アメリカの縮図としての「天の牧場」を考察していく前に，少し長くなるが，個々の章の概略について述べる。前章で述べたように，『天の牧場』では「天の牧場」を外から概観する第三者の観点で描かれている第１章と第12章を除き，それ以外の10章に「天の牧場」のなかでの出来事が描かれている。

第１章では，1776年頃にカルメロ伝道所にやってきたスペイン人の伍長が逃亡中の改宗インディアンのグループを追跡し，彼らを捕えたあとに，偶然に「天の牧場」を発見したことが書かれている。しかし，伍長自身は発見した「天の牧場」で生活することはなく，インディアンの女性から感染した天然痘が原因で命を落とした。その後は数家族が「天の牧場」に住むことになり，100年後には「天の牧場」には20の農場ができ，20家族が

住むようになっていた。住民は平穏に暮らし，土地も肥沃で豊かになった。

第 2 章では物語の中心人物となる，バート・マンロー（Bert　Munroe）が「天の牧場」にやってきて，農場を所有するまでのプロセスが述べられている。バート・マンロー及びその一家は「天の牧場」での出来事を描くすべての物語章に登場し，それぞれの登場人物に影響を与えることとなる。

第 3 章では，シャーク・ウィックス（Shark　Wicks）一家が主人公となり，ストーリーが展開されていく。シャークは架空の帳簿を持って，自分は金を持っていると周囲に思わせている。そして，妻キャサリン（Katharine）との間に生まれた，たぐいまれな美貌の娘アリス（Alice）の純潔に固執する。シャークが伯母の葬儀でオークランドに滞在中に，キャサリンとアリスはダンスパーティに参加したが，母が目を離したときにアリスはバートの息子のジミー・マンロー（Jimmie Munroe）にキスをされる。その事実を知ったシャークは怒り狂うのだが，同時に彼には金がないという事実も明らかになった。ゆえに，シャークの一家は「天の牧場」を去ることになる。

第 4 章はテュラレシート（Tularesito）という少年の物語である。

第 5 章は新しく「天の牧場」にやってきたヘレン・ヴァン・ディベンター（Helen　Van　Deventer）とヒルダ（Hilda）母娘の物語である。結婚後すぐに夫を亡くしたヘレンは夫の遺体を剥製にして夫がかつて愛用していた銃とともに保存しており，人生の悲劇を強く意識している人間である。娘のヒルダには精神異常が原因の虚言癖があり，家から逃げることのみを考えている。ある日，部屋に閉じこめられていたヒルダは金切り声をあげていたところをバートに見つけられて，彼に話しかけた。ヒルダの虚言癖はエスカレートし，ヘレンは娘の精神異常を治療することよりも娘の精神異常に耐える自分が悲劇に耐えていることや自分の幻想の世界に酔いしれる。しかし，ヘレンとヒルダの母娘関係は完全に崩壊しており，ある日，ヘレンはヒルダを銃殺してしまう。ヒルダには精神異常があるということ

で自殺としてみなされ，ヘレンは罪に問われることはなかった。しかし，ヘレンはこの土地をあとにすることになった。ヒルダの療養のために母が選んだ「天の牧場」は2人にとって決して天国ではなかった。

第6章はサンフランシスコでかつて会計士として働いていたジュニアス・モルトビー（Junius Maltby）が病気の療養のために「天の牧場」にやってきたことから始まる。彼はクエーカー（Ms. Quarker）の家に下宿することになるが，のちにこの女性と結婚し，ロビー（Robbie）という息子が誕生する。ジュニアスは「天の牧場」にやってきてからは働くこともなく，妻の死後には彼は息子の育て方がわからず，大人として扱っていた。さらに，彼は息子の就学年齢を忘れる始末であり，自由な教育をし，息子に靴も履かせずに粗末な服装で学校に行かせる。息子は学校では人気者であるが，マンロー夫人をはじめ教育委員会の婦人たちは彼の粗末な服装に衝撃をうけた。婦人たちがプレゼントとしてロビーに洋服を送ったことに，ジュニアスは衝撃を受けて都会で働くために「天の牧場」をあとにしてしまう。

第7章はRosaとMariaのロペス姉妹（Lopez Sisters）を軸にして，物語が展開される。亡き父の残した畑を耕して生計を立てることをせずに，トルティーヤやエンチラーダなどメキシコ料理を出すことで生計を立てていた。ある日，料理を3皿食べた客にマリアが感謝のあまり体を提供してしまう。以後，姉のローザも同じ行動をとるようになり，店は繁盛する。後日，マリアは馬車で買い物に行く途中でアレン・ヒューネカー（Allen Hueneker）を同乗させた。その様子を目撃したバートがヒューネカーの妻に告げ口することによって，騒動となった。このことがきっかけとなり，姉妹はサンフランシスコで売春婦になるために「天の牧場」を去った。

第8章は小学校の教師のモリー・モーガンの物語である。「天の牧場」にやってきたモリーはホワイトサイド（Whiteside）家に下宿して，教員として充実した日々を過ごしていた。しかし，モリーは失踪した父親が生き

ているのかどうか強迫観念を抱いていた。教育委員会の会合の際に，バートが自分の家にやってきた得体のしれない男についての話を始め，その男の様子が自分の父親にとても良く似ていると感じたため，彼女は嫌悪感を覚えた。後日，バートがその男の話題を出した時に，彼女は「天の牧場」を去る決断を下した。

第 9 章ではレイモンド・バンクス（Raymond　Banks）の隠された面が暴かれる。彼の農場はきちんと整頓されて，家畜もきちんと飼育されており，性格も非常によく皆に慕われている。鶏を殺すときにも鶏に苦痛を与えないように手際よく殺す彼であるが，彼の唯一の気晴らしは看守である友人に招待されて，死刑執行を見ることである。バーベキュー・パーティーでバンクスに会ったバートが自分も死刑執行に立ちあいたいと申し出るが，立ちあいの許可が下りると，バートは“I'm scared I couldn't get it out of my head afterwards.”（144）と言って同行を拒否する。そのようなバートに対して，バンクスは嫌悪感を覚える。

第10章はパット・ハンバート（Pat　Humbert）の物語である。両親が他界してからも，両親の亡霊に支配されているパットは気分転換をすることもなく，家を自分が気にいるように改良することもなかった。ある日，彼の家のそばを通ったメイ・マンロー（Mae Munroe）が“Do you remember the postcard of the lovely house in Vermont? Uncle Keller sent it. This house, with the rose over it, looks just like that house in the picture. I'd like to see the inside of it.”（159）や“With a rose like that on the outside, the inside must be pretty. I wonder if Mr. Humbert will let me see it sometime.”（159）というようにパットの家に関心を示す。メイのことばに反応したパットはバーモント州で見られる家がどのような家かを研究して，居間を改装した。そして，居間をバーモントで見られる家のように改装して彼女に見せようと決断したときに，皮肉にも彼はメイとビル・ホワイトサイド（Bill　Whiteside）の婚約を耳にした。結局，彼は新しい家でも両

親の亡霊にとらわれて生き続けなければならなかった。

第11章ではリチャード（Richard）の「天の牧場」への入植からジョン（John），ビル（Bill）に至るホワイトサイド家の物語が展開されている。リチャードに始まるホワイトサイド家は「天の牧場」でほかの家族から信頼を得て，名家の１つとなっていく。しかし，バートが提案した野焼きが原因でジョンは火事で家を失い，妻とともに結婚したばかりのビルを頼ってモントレー（Monterey）に向かう。

エピローグとなる第12章は，バスで17マイルドライブを走る観光客たちが彼らの目に映っている，美しい「天の牧場」について，思い思いに感想を語っている。

プロローグ，エピローグ以外の部分を見てみると，「天の牧場」での人々の生活が決して幸せに満ちているものではないことがわかる。第１章と第12章を除いて，各章の中心人物がバート・マンローやその家族との関わりがあり，そのうちの６組が「天の牧場」を出てしまうことは注目に値する。つまり，スタインベックは楽園を彷彿させる「天の牧場」というコミュニティの名前とそこでの人々の暮らしで見られるアイロニーを描きだし，物事が起こる様子をありのままに見つめながら，本質を見抜く非目的論な思考を抱くことの重要性を伝えている。[注6]

そして，この物語においては，人物たちは「現実の厳しさ」「コミュニティの視線の厳しさ」をつきつけられ，そして，ほとんどの人物たちが土地と縁があり，土地との関わり方で彼らの運命が変わっている。土地との関わりを顕著に描いている２，４，11章は，「天の牧場」がアメリカの縮図つまりアメリカの歴史の語りなおしとして映る様子を表現している。

２　アメリカの縮図として映る土地

アメリカ人の本質は移動にあると言っても過言ではない。この事実は『ア

メリカとアメリカ人』(*America and Americans*, 1966) における“One of the generalities most often noted about Americans is that we are a restless, a dissatisfied, a searching people. We brindle and buck under failure, and we go mad with dissatisfaction in the face of success.” (330) という記述や『天の牧場』での“There are very few old houses in the West. Those restless Americans who have settled up the land have never been able to stay in one place for very long.” (189) という記述で裏付けられる。アメリカ人が“restless”であることや成功を求めて移動することは，自分たちの暮らしの安定のみならず，最終的には国の発展に大きく結びついてきた。移動の根本的な要因は貧困や困難から逃れることであるが，その原因として，仕事の不足そして土地の不足が考えられ，耕すべき土地の不足は食べ物の不足を意味する。そのことについて，クレヴクール（Crèvecour）が『アメリカ農夫の手紙』(*Letters from an American Farmer*, 1782) で以下のように述べている。

> Can that man call England or any other kingdom of his country? A country that had no bread for him: whose field procured him no harvest; who met with nothing but the frowns of the rich, the severity of the laws, with jails and punishments; who owned not a single foot of the extensive surface of this planet.（中略）His country is now that which gives him his land, bread, protection, and consequence. Ubi panis ibi patria is the motto of all emmigrants.（42–43．下線部筆者）

ゆえに，「土地，パン，保護，結果」を求めてヨーロッパ出身の人は自分たちの土地を捨て，アメリカへと移住し，同様にアメリカ国内でも移動をする。“We hold these truths to be self－evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable

Right, that among these are Life, Liberty, and the pursuit of Happiness.”（The Declaration of Independence，２段落目）とアメリカ独立宣言にもあるように，アメリカという新しい大地が，さらに国内での新たな土地が人を自由にし，幸福に，平等にすると信じるゆえに，人々は移動を続ける。また，自然や土地の美や静けさを愛し，農業に親しみを見出だすトーマス・ジェファーソンの考えも土地を開拓する，アメリカ人の精神的な支えとなる。この考えや希望はおそらく「天の牧場」に入植して新たな生活を送ろうとする人々たちが共有している。しかし，スタインベックは人々が目指していく新しい土地そのものを彼らにとってのエデンとなるように描いてはいない。

さらに，スタインベックはアメリカの誕生について，決して新しい土地を求めるロマンティシズムだけに焦点をあててはおらず，アメリカの負の面を見逃していない。

> America did not exist. Four centuries of work, of bloodshed, of loneliness and fear created this land. We built America and the process made us Americans—a new breed, rooted in all races, stained and tinted with all colors, a seeming ethnic anarchy. Then, in a little, little time, we became more alike than we were different—a new society; not great, but fitted by our very faults for greatness, *E Pluribus Unum*.（*America and Americans*320）

そのことを思い出させるかのように，『天の牧場』は逃亡中の改宗したネイティブ・アメリカンたちを探すスペイン人伍長の話で幕を開ける。彼が偶然に発見した土地は非常に美しいものであった。

> In a few minutes he arrived at the top of the ridge, and there he

stopped, stricken with wonder at what he saw—a long valley floored with green pasturage on which a herd of deer browsed. Perfect live oaks grew in the meadow of the lovely place, and the hills hugged it jealously against the fog and its wind.

The disciplinarian corporal felt weak in the face of so serene a beauty. He who had whipped brown backs to tatters, he whose rapacious manhood was building a new race for California, this bearded, savage bearer of civilization slipped from his saddle and took off his steel hat.

"Holy Mother!" he whispered. "Here are the green pastures of Heaven to which our load leadth us."（下線部筆者，1–2）

この引用から，伍長が発見した「天の牧場」には楽園と呼ぶにふさわしい緑豊かな美しいカリフォルニア，「乳と蜜の流れる地」ともいえる自然の美しさが強調されたカリフォルニアが描かれている。伍長が「天の牧場」を発見した年が1776年であることは東部13州がアメリカ合衆国として独立した年を想起させ，まだメキシコの一部であったカリフォルニアの未開の美しさがより強調される。しかし，スペイン人伍長の存在はネイティブ・アメリカンの土地であるカリフォルニアへの外国による征服，そして新しくアメリカ人となった人々が自分たちの新たな土地を求めて，ネイティブ・アメリカンの土地を自分たちの土地にしていこうとすることを示唆する。「天の牧場」への入植を企てた伍長が，ネイティブ・アメリカンの女性から天然痘をうつされて命を落とすことは，あたかも彼自身が元来その土地に住んでいた者から自分たちの土地に侵入したことに対する罰を与えられたかのようである。

スペイン人の伍長が美しいと思った，緑豊かな「天の牧場」はそこで生きる人にはどのように映るのか。ここで，第４章のテュラレシートの例を考察していく。

テュラレシートは赤ん坊のときに捨てられ，メキシコ系インディアンのパンチョ（Pancho）に拾われて，パンチョとともにフランクリン・ゴメス（Franklin　Gomes）のもとで生活していた。捨て子であるゆえ，彼の出自はわからず，不思議な容姿からもパンチョやゴメスからは“Little Frog”（40）や“Coyote”（42）と呼ばれる。人間らしい愛称がついていないことは，彼が単なるハーフウィットの子供でなく，人間離れしていることを裏付ける。またセージの茂みの開けた場所に捨てられていた事実はテュラレシートは自然と非常に深いかかわりを持つことを暗示し，成長に伴い，彼と自然の結びつきは強くなる。

> At six Tularesito could do the work of a grown man. The long fingers of his hands were more dexterous and stronger than most men's fingers. On the ranch, they made use of the fingers of Tularesito. Hard knots could not long defy him. He had planting hands, tender fingers that never injured not bruised the surface of a grafting limb. His merciless fingers could wring the head from a turkey gobbler without effort. Also Tularesito had an amusing gift. With his thumb nail, he could curve remarkably correct animals from sandstone.（42）

“ancient　wisdom”（42）を持つテュラレシートの指先が器用に動く様子は，「菊」（“The Chrysanthemums”）のイライザ・アレン（Eliza Allen）や「白いウズラ」（“The White Quail”）のメアリー・テラー（Mary Teller）が巧みに庭や植物をいじる様子を彷彿させ，自然と深く結びついた天性の才能を感じさせる。そして，自然と一体になっている様子は彼と自然のかかわりがいかに深いかを伝える。また，知能が低くとも，言われたままに行動し，ある分野に卓越した能力を発揮できるという点では『二十日鼠と人間』（*Of Mice and Men*, 1937）のレニー（Lennie）や「ジョニー・ベア」

(“Johnny Bear”) のジョニー・ベアを想起させる。

11歳になったテュラレシートは学校に行くことを強制された。学校に行くことは, ジェファーソンが説く教育重視の理念の反映であり, そしてテュラレシートが学校に行くことを拒む様子は既存の価値観の押しつけとアメリカの発展の理念を拒んでいることを意味する。彼が学校に行かなければ, 法で罰せられる。ゆえにテュラレシートを学校に強制的に行かせることは白人が保護区に住むネイティブ・アメリカンに遠隔地の学校に強引に通わせ，英語を学習させて，彼らの文化を奪おうとすることに重なる。白人の倫理観の象徴である学校はテュラレシートにとって面白いはずはなく，黒板にうまく動物の絵を書いたりするものの，代数などの授業には関心を示さない。彼は自分が描いた動物の絵を消されると凶暴になる。彼が唯一関心を抱くものはモリー・モーガンが語った大地の精霊ノーム（Gnome）である。ノームを“my own people who live deep in the cool earth”（51）や, “My own people are like me, and they have called me. I must go home to them, Pancho.”（51）と思いながら，彼はノームを探すために穴を掘ることに執着する。彼はバート・マンローの果樹園の土地に穴を掘るたびに, 穴を不審に思うバートはその穴を埋める。その様子を目撃したテュラレシートはバートをシャベルで攻撃してしまう。それが原因で，ついに彼はナパにある精神異常犯罪者収容施設へと送られる。この様子は自然と一体になって生きてきた少年が既存の価値観つまり，文明や常識に敗北したことを意味する。換言すれば，彼自身が白人に生まれながらの土地を奪われるネイティブアメリカンそのものである。

テュラレシートの寂しさが癒される時はノームを思うときだけだったが, なぜ彼はノームを探すことにこだわるのか。学校でテュラレシートがほかの生徒との差を否応なしに目にすることから生じる孤独感のみならず，他者の視線の冷たさや偏見，そして自分の存在するべき場所（ルーツ）について理解していないことが原因としてあげられる。

The heart of Tularesito gushed with joy at his home coming. All his life he had been an alien, a lonely outcast, and now he was going home. As always, he heard the voices of the earth—the far off clang of cow bells, the muttering of disturbed quail, the little whine of a coyote who would not sing this night, the nocturnes of a million insects.(52)

大地の中で，捨て子の彼がノームを探すことで自分の存在すべき場所やルーツを見つけようとすることや友達を探そうとすることも自然を愛する彼には当然の行動である。

中島美智子はテュラレシートの言動に関して，『知られざる神』に登場するネイティブ・アメリカンであるファニートのことば「大地はおれたちの母で，生きているものはみんな，母から命をもらい，その母のもとに戻っていくんだ。」（33，中島訳）を引用して，ネイティブ・アメリカン的精神世界の人物的具現化がツラレシートの設定には暗示されている（114）と指摘している。ゆえに，大地に人間の起源を探すことはネイティブアメリカンにとって当たり前である。大地を母として考える大地母神の信仰から考えると，すべての生命は大地に戻るのである。また，管啓次郎は，土地の重要性の３つの理由として以下のことをあげている。第１に人が生きるための物質的根拠をすべてを土地が与えてくれること。第２に，土地とは自分の先祖たちが死に，葬られ，文字どおり土に還っていった場所，第３に土地は「美しい」ことである。（61–62）ゆえに，テュラレシートは地上の世界のいやらしさも醜さもなく，何にも染まっていない土に美と親しみを感じたのではないか。彼の行動には，仲間のノーム，そして「母なる大地」を探求すると同時に，どんな差別もなく，自然と向き合う者皆に報酬を与える大地の平等性にひかれ，大地に自分の存在価値を見出そうとしたのである。そのような彼を理解することができなかった「天の牧場」は彼にとっては決して楽園ではなかった。テュラレシートが囚人用の精神療養

施設に収容される様子は白人たちがネイティブ・アメリカンを自分たちの土地から追いやり，保護区へと移動させる姿を彷彿させる。彼にとって他人と違うところがある人間を精神療養施設へと追いやり，法と教育で人を押しつける「天の牧場」はネイティブ・アメリカンが差別される土地としてのアメリカの縮図に過ぎなかった。

3　白人にとっての土地

次に，白人にとっての土地について，第２章と第11章を取り上げて考察を進めていく。第２章は農場の最初の持ち主であるバトル家の描写（To the people of the Pastures of Heaven the Battle farm was cursed, and to their children it was haunted. Good land although it was, well watered and fertile, no one in the valley coveted the place, no one would live in the house, for land and houses that have been tended, and loved and labored with finally deserted, seem always sadden with groom with threatening. 6）で始まる。父親のジョージ・バトル（George Battle）はホームステッド法（Homestead　Act）施行の翌年の1863年に「天の牧場」に入植し，農場をきれいに維持し，しっかり農場を守っていたが，息子のジョン・バトル（John　Battle）は農場に関心を払うこともなく，狂信的なキリスト教信者で，ガラガラ蛇にかまれて命を落とした。1921年には，農場はマストロヴィック家に所有されるが，彼らも姿を消していく。ゆえに，バトル農場には呪いがあるという噂が伝わり，後にモントレーからやってきたバート・マンローがその農場を購入した。彼は自動車の修理工場，食料雑貨店経営といった事業や豆の買いつけで失敗し，絶望していた。彼を唯一救うことができるのは農業，つまり土地であったことを以下の文章が示している。

“<u>This time he was sure of the curse</u>. His spirit was so badly broken that

he didn't leave his house very often. He worked in the garden, planted a few vegetables and brooded over the enmity of his fate. Slowly, over a period of stagnant years, a nostalgia for the soil grew in him. In farming, he thought, lay the only line of endeavor that did not cross with his fate. He thought perhaps he could find rest and security on a little farm."（下線部筆者，17）

"The moment he had bought the farm, Bert felt free. The doom was gone."（17）という表現や「彼（移民）の国とは土地，パン，保護や結果を与えてくれる国である」という先述のクレヴクールの言葉をふまえると，バートが商売に失敗して「天の牧場」にやってきたときの様子は，今まで生活していたヨーロッパを捨てて，アメリカという新しい土地にやってきて，のちに成功を収める移民の姿に重なる。

彼が「天の牧場」に居住して，自分で土地を耕して，新しく，希望に満ちた，自分だけの土地を所有することによって，育てているものが１つ１つ成長していると実感することで彼は自由や幸福を感じ，生きる自信を取り戻していることが上記２つの引用から明らかである。彼の土地との結びつき方をみると，テュラレシート同様にバートも土地から生きる力と自分の存在意義を得ている。しかし，バートは鋭い観察力もあり，村人に親切に接したこと，彼が白人であることも農場を成功させた。

今まで取り組んでいた商売がうまくいかないことも自分にかかっていた呪いとして考えていたバートが，農業をすることで呪いも殺すほどの強い精神力や生きる力を得て，「天の牧場」の教育委員会のメンバーにもなるほど住民の信頼を得られるような存在に変わった。では，彼は呪いに対しては，どのように対処したか？呪いについて，彼は雑貨店を営むT.B.アレン（T. B. Allen）と次のような会話を交わす。

"I buy a place that's supposed to be under a curse. Well, I just happened to think, maybe my curse and the farm's curse got to fighting and killed each other off. I'm dead certain they've gone, anyway."（中略）
"Maybe your curse and the farm's curse has mated and gone into a gopher hole like a pair of rattlesnakes. Maybe there'll be a lot of baby curses crawling around the Pastures the first thing we know."（19）

バトル農場に潜在している呪いに対して，「天の牧場」の住民たちは恐怖を抱くのだが，バート自身は農場を耕すことによって，農場にある呪い，そして，自分にかかっていた呪いをなくしてしまった。自分が居住する前から家の中にあった古い品物を捨てて，新しい家具や電話を入れた。そして土地を耕すことによって，呪いが消えて新しい生活をスタートできることはいかに人間と土地との関わりが深いかということを示している。また，「大地で働く人々は神の選民」（松本，262）であるというジェファーソンの考えをふまえると，ジョージ・バトルが農場をきれいに保っていたこと，そしてバートが農業に専心していたことからも明らかなように，人間の頑強さのみならず土地との密着や勤勉さがアメリカでの成功の可能性となる。ゆえに，土地を耕すことで成功をなしとげたバートは農業に密着した理想的なアメリカの民である。土地を耕すことを放棄したジョージ・バトルの狂信性や第 6 章でのジュニアスの怠惰や土地への姿勢（He liked the valley and the farm, but he liked them as they were; he didn't want to plant new things, not to tear out old. 75）では，土地に見捨てられてしまう。バートが「天の牧場」で成功を収める様子を通して，スタインベックは土地を開拓することによって，誰でも自分自身の理想のアメリカを作り上げていき，そしてアメリカという国家に貢献することができ，アメリカで成功する可能性があると説いている。

さらに，バートが「天の牧場」にやってきた年が1921年以降であること

は，アメリカの繁栄期であるJazz　Ageを我々に想起させる。農業に転身し，「天の牧場」での住民の信頼を得て，この土地の名士になったバートの姿はジャズ・エイジを満喫するアメリカの姿そのものであり，同時に，機械化・工業化で高揚したアメリカへの戒めでもある。

次に，第11章のホワイトサイド一家について分析を進めていく。この章では，ジョン・ホワイトサイドの父親であるリチャード・ホワイトサイドが1850年頃に東部から「天の牧場」にやってきて，自分の農場を作り出し，その息子のジョン，孫のビルに至る3代の人間の土地への考え方を垣間見ることができる。リチャードが1850年頃に東部からカリフォルニアにやってきたことは金を求めてやってきた49ersの来訪と時期的に重なるが，“The earth gives only one crop of gold,” he said. “When that crop is divided among a thousand tenant, it feeds no one for very long. This is bad husbandry.”(169）というリチャードの言葉が彼の実直さを裏付ける。リチャードが生まれてくる息子にDavidという名前を付けたかったにかかわらず，妻のアリシアはJohnという名前を付けることを望んでいるという事実に関して，ティマーマン（Timmerman）は“David stands prophetically, then as the father of royal priesthood.”(64）と“But there is also the clear suggestion of the end of the lineage. In the New Testament, John appears as the last of the prophets, the forerunner to Christ, and none will come after him to prepare the way.”（65）というように，ホワイトサイド家が長くは存続できない暗示であると指摘している。

東部からやってきたリチャード，「天の牧場」で生まれたジョンが願っていることは「天の牧場」に定住し続ける子孫を産み育て，ホワイトサイド家を存続させることである。しかし，注目すべき点は彼らがホワイトサイド王朝（Whiteside　Dynasty）を作ろうとすることだ。独立した，自由で平等であるはずのアメリカでDynastyという独裁的なものを作りたいと願うことは一見矛盾しているようにも感じられる。

リチャードが教育があり，立派な農場を持っているということはジェファーソンが説く理想的なアメリカ人の要素を持っていて，成功しているアメリカ人像を具現化している。

定住することはアメリカの移民の大きな夢であると同時に，アメリカ人は自分たちが生きるために，ふさわしい場所を探し求めて移動をすることに対しても抵抗を持たない国民でもある。そのようなアメリカ人にとっては，適切に管理をすれば，500年も持つような大きな家を建てたいというリチャードの定住の意思を理解することは難しいようである。そのことは以下の会話から理解できる。

> “It sounds fine, but that’s not how we work out here. We build a little shack, and if the land pays, we build a little more on it. It isn’t good to put too much into a place. You might want to move.”
> “I don’t want to move,” Richard cried. “That’s just what I’m building against. I shall build a structure so strong that neither I nor my descendants will be able to move. As a precaution, I shall be buried here when I die. Men find it hard to leave the graves of their fathers.”（171）

同時に，この文章はリチャードの土地や家への執着がいかに大きく，家が続くことの重要性を強調している。リチャードは決して朽ちることがないアメリカスギで家を建て，スレートを屋根に使用することにもこだわった。そのために，彼は建築材料をボストンから仕入れた。さらに，“He modeled it（his house）after the style of the fine country houses of New England.”（172）という記述があるように，ニューイングランド風の家にこだわる。ニューイングランドはアメリカの歴史が始まった場所であり，東部出身のリチャードには故郷のような場所であったからだ。さらに，ニューイングランド風の家を建てることで，彼が「天の牧場」を新しいニューイ

ングランドとして見なし，故郷の東部の再生を試みていると解釈できる。リチャードのニューイングランドへのこだわりは彼の家族にも表れる。リチャードはたまたま旅行で西部に来ていた東部出身の遠縁の娘アリシアを“There would be no accidents of blood if he married this girl.”（173）と考えたことや，またアリシアに対して，子供を持つことの大切さを語りながら，“From central hearth our blood was mingled with the good true blood of New England.”（174）とニューイングランドの血を重視する。彼は夢の成就のために土地とすばらしい家を欲し，また丈夫でない妻に対しても子供を産むという仕事を強制する。皮肉にも，２人の間に生まれた子供はジョンのみであり，ジョンの子供もビル１人だけである。

そして，以下の引用からリチャードの家の絶対的な存在感やリチャードの支配性がうかがえる。

> The house was the symbol of the family—roomy, luxurious, for that day, warm, hospitable white. Its size gave an impression of substance, but it was the white paint, often renewed and washed. … The families admired the white house, and also they felt more secure because it was there. It embodied authority and culture and judgment and manners. The neighbors could tell by looking at his house that Richard Whiteside was a gentleman who would do no mean nor cruel nor unwise thing. They were proud of the house in the same way tenants of land in a duchy are proud of the manor house. … As he grew older he came to regard all the affairs of the valley as his affairs, and the people were proud to have it so.（下線部筆者，178－179）

土地や財産のみならず，リチャードの絶対性はジョンにも受けつがれ，リチャードとジョンの生き方は重なる。ジョンも父親と同様に，ハーバー

ドに進学するが，彼はギリシャの古典を好み，東部出身の女性ウィラと結婚し，「天の牧場」の名士となる。彼は教育委員会の委員長という責任職につき，教育の重要性を説き，立派な農場を持ち畑を耕す生活を送ることで，リチャード同様にジェファーソンの説く理想的なアメリカ人となる。さらに，ホワイトサイド家の世代が下がっていくにつれて，次第に農業への関心は低くなっていく。ゆえにジョンの息子であるビルは，父や祖父のように土地を大切にすることはなく，都会や商売に関心が向かっている。さらに，彼はバートの娘のメイ・マンローと結婚することになり，モントレーで暮らす決心をする。ビルの結婚後，ジョンは力が抜けて，農場を放置したままであった。

リチャードが開墾し，発展させ，ジョンが守ってきた農場や家がバートが提案した野焼きが原因で火事になり，建物のみならず，リチャード以来の古い伝統と夢は消失した。土地を肥沃にする野焼きはすべてを奪い，ジョンとウィラの夫妻も息子を頼って，「天の牧場」をあとにする。皮肉にも，家事で家を失ったというホワイトサイド家の歴史は繰り返される。

ここで，ある疑問が残る。テュラレシートもバートもリチャードもジョンも土地を大切にしてきた人間であるのに，どうしてこのように運命が分かれてしまうのだろうか？バトル農場の呪いとバートにふりかかった呪いが１つになったものが散らばった結果であると言ってしまえば，おしまいであるが，ここにもアメリカの歴史を象徴する点が見られる。また，バートのように自然の力を信じて農業をせずに，リチャードが人間の欲望を自然に押しつけたことも原因である。

ホワイトサイド家の物語は新しい世界のなかで，旧世界の価値観を構築した歴史の語りなおしであると考えられる。また，ホワイトサイド家はアメリカに最初に入植したアングロサクソンであることを意識させる。そしてホワイトサイド家が支配的な存在であることは，尊敬のみならず，モルトビーの自由な教育を拒んだジョンの態度からも見えるように人種などを

含むさまざまなマイノリティに対してみられる差別の表れとして解釈できるのではないか。捨ててきた世界への尊敬や回顧，そして支配者階級の存在は，新しい土地で生きる人々には不必要である。ゆえに新しい世界で生きていこうとする人々のなかでは，ホワイトサイド家は結局は西部の倫理観に合うことはないので，排除されてしまう。

1850年にリチャード・ホワイトサイドが「天の牧場」にやってくることは西部開拓を試みて西へと進んでいく移民の姿に重なっており，1920年代に家を失ったジョンが都会に住むビルのもとに行くことは古いアメリカを払拭し，新しいアメリカの誕生に至る転換期を象徴する。

4　住民を追放するもの

『天の牧場』では，バートやその家族と関わったことがきっかけとなって，「天の牧場」を去ることを余儀なくされる人物たちやバンクスやパットのように「天の牧場」を出なくても，心に大きな苦痛を残される者もいる。物語が展開される10章のうち，７章において，バートやその家族と関わった人物たちは「天の牧場」を去る。「天の牧場」を離れることは，バートの行動や１つになった呪いが原因として考えることも可能であるが，すべてバートの行動が原因であり，追放される側にはまったく非がないと言えるのだろうか。

「天の牧場」にやってくる者たちの多くは，かつて生活していた場所に絶望し，この場所を地上の楽園と信じ，そこに希望を見出している人々であった。それは，バートも同じである。建国当時のアメリカと同様に，「天の牧場」では希望を失ったすべての者たちを受け入れる寛大さがある。しかし，「天の牧場」は彼らを追い出すときには非常に冷酷である。

「天の牧場」で描かれている人物たちは「幻想」「狂気」「虚栄」「怠惰」のようないずれかの問題を抱えている。つまり，これらは人間の内面には

よく見られるが，アメリカの抱える自己矛盾（注７）と同様に，アメリカという国の表裏をなすものである。ゆえに，アメリカの負の面はアメリカの発展には妨げとなる。とくに，第６章のジュニアス・モルトビー，第８章で登場する，バートの家の雇い人である，モリー・モーガンの父親とおぼしき男の怠惰は「勤勉」をモットーにして発展してきたアメリカには特に受け入れがたい性質である。同様に，第３章で描かれたシャーク・ウィックスのように，自分を金持ちに見せようとする虚栄心は拝金主義的なアメリカを表している。そしてシャークのように女性の純潔を重んじる男たちがいるなかで，第７章で見られるように，売春を期待する男たちもいること，そして男たちの欲望を満たす女たちを社会悪としてみなすアメリカの道徳感に対する矛盾もスタインベックは暴き出している

バートの存在は呪いや触媒（catalyst）と考えられるが，彼は「天の牧場」の登場人物の秘められた面を暴き出していく存在であり，決して否定的な存在として単純に解釈してはいけない。バートはアメリカの，そして「天の牧場」の本質をも暴露する人間として考えられる。ゆえに，すべての章に，バートは登場するのではないだろうか。つまり，「天の牧場」が名前のごとく，外面を欺く楽園であるとしたら，追放される人間も「天の牧場」に欺かれ，そして「天の牧場」の人々の視線を無意識に欺いていた人間なのである。これも連帯の中に隠されたアメリカの抱える自己矛盾として考えられる。

「天の牧場」にいるすべての人間と関わりを持つために，バートは災いに見えてしまうが，実は彼は「天の牧場」の平和を維持し，コミュニティを支えている。つまり，彼はアメリカの毒となる面，つまり不適合なものを削除している。

多くの人物たちが追放されるということは，楽園だと信じてきた「天の牧場」は実は楽園ではないということを示す。定住すべき自分の楽園は自分自身の手で作り上げないといけないということを，農場を耕すことに希

望を見出してきたバートが追放された人物に対して伝えているかのように映る。「天の牧場」を出る人物たちは，結局コミュニティにふさわしくないという理由で，「天の牧場」を離れなければならなかった人物なのである。「天の牧場」をアメリカの縮図として考えると，バートはアメリカ人として理想的ではない性質の人間を「天の牧場」の平穏を維持するために，「天の牧場」から追放するように仕向ける管理人のような役割を果たしている。

結び

ここまで，テュラレシート，バート，ホワイトサイドにとっての土地のとらえ方を介して，アメリカの縮図としての『天の牧場』を考察してきた。人間にとって，土地にしっかりと根ざして生きていくことは非常に大切なことであるが，実は生活すべき土地に生きていながらも，土地と一体感を感じつつも，人間は疎外感に苦しむ。この疎外感こそが『天の牧場』の登場人物における共通の感情である。疎外感が『天の牧場』における負の要素，つまり，幻想，差別，虚栄，怠惰を生むのだ。「天の牧場」とは，混ざりあっているようで，決して混じってはいない人間たちの集合体であるため，その中で疎外感と戦いながら，運命に対する自らの選択を持つことがこの地で生きていくために大切なのである。自らの選択をしない限り，土地を耕すだけでは土地は決して力を貸さない。土地を持っていても，耕すことをしなかった人間たちに土地は力を貸せない。土地の呪いとは土地から心身ともに離れたから生じ，人間の心が生んだものである。

そういう意味では，バートは呪われた農場を購入して，その土地を耕したことで自信を取り戻すことができたので，自分の運命に対する自らの選択をしたといえる。バートのそのような性質と精神力は，「勤勉」や「実直さ」と同様に，理想とされるアメリカ人の性質である。

『天の牧場』をアメリカの歴史の語り直しと考えるのであれば，現代の「天の牧場」はさまざまな問題を抱えている。アメリカ人がかつて土地を奪ったメキシコをルーツにする人々が新しい移民となった現代でも，人種差別も完全には消えず，貧富の格差はますます拡大していく。楽園と呼ばれる場所は自分で探すだけでなく作っていかなくてはいけない。そのために，理想的なアメリカ人は現在でも移動を続けていくのである。定住を目指しながらも移動していくことがアメリカ人として生きていくことの象徴であり，バイタリティの根源でもある。そのことを考えると，「天の牧場」を出ていかなければならない人物たちも，「天の牧場」を離れることでよりふさわしい生き方を探すことができる可能性もある。そういう意味では，彼らも理想的なアメリカ人になれる潜在的な可能性もある。

「土地を得る」ためでも「新天地で金を儲ける」ためでも，１つの目標に向かって移動をしたり，定住をめざしたりすることがアメリカでは重要である。どのような状況でも生き続けていくこと，そして，スタインベックの作品に描かれているメンタリティこそが『天の牧場』が発表された1930年代という暗黒時代を生き抜いていくために必要とされる精神力であり，リーマンショック以後のアメリカに生きる人間に求められる。あえて歴史を語りなおすことで，もう１度アメリカの理想の姿を見直し，この苦しい時代にこそ，アメリカ独立当時の精神を振り返り，つまり土地の持つ生命力に注目する必要性を『天の牧場』は説いている。

注

１．本文中における『天の牧場』は作品のことを表し，「天の牧場」は舞台となっている土地のことを表す。

２．『天の牧場』は第２作として発表された作品であるが，スタインベックは『天の牧場』の執筆以前に『知られざる神に』の執筆に早く取り組んでいたため，『天の牧場』を３作目として考える解釈もある。

３．『黄金の杯』が空想の世界を描いている理由について，西村千稔は「スタインベックよりも先行する作家たちは，大戦を経験し20年代を享受しながら，硝煙の生々しい

匂いや戦後の沸き立つエネルギーを作品に投影していた。一方戦場を走り回ったことのないスタインベックは，持てる作家的素質を空想の世界へ向けざるをえなかったのである」と分析をしている。

4．Nagel が指摘するよりも前に，Ingram はストーリー・サイクルの特徴について，以下のような解釈をしている。“A story cycle is a set of stories so linked to one another that reader's experience of each one is modified by his experience of the others.”（13）

5．Steinbeck は1931年５月８日の Mavis　McIntosh 宛ての手紙にて，舞台となる場所について以下のように述べている。“There is, about twelve miles from Monterey, a valley in the hills called Corral de Tierra. Because I am using its people I have named it Las Pasturas del Ciero.”（*A Life in Letters*, 44）

6．『黄金の杯，天の牧場』の訳者解説において，ウォレン・フレンチの「外観は人を欺く」ということをこの作品のテーマであることを前提とし，「確かにスタインベックはこの作品において，見せかけに騙されずにものを見ること，いわゆる非目的論的（non-teleological）観点を持つことの必要性を述べている。」（557）という記述がある。なお，『天の牧場』についての非目的論的思考についての論文には，上優二による「『天の牧場』における非目的論的思考の展開」がある。

7．『アメリカとアメリカ人』において，スタインベックはアメリカ人の持つパラドックスにおいて，言及している。“The paradox are everywhere: We shout that we are a nation of laws, not men—and then proceed to break every law we can if we can get away with it.”（332）

参考文献

Crèvecoerur,J. Hector St. John de, *Letters from an American Farmer*. London: UP of Oxford. Reprinted. 2009.

Fontenrose, Joseph. *Steinbeck's Unhappy Valley: A Study of* The Pastures of Heaven. Berkley, 1981.

Ingram, Forrest L. *Representative Short Story Cycle of the Twentieth Century:Studies in a Literary Genre*. The Hague: Mouton Press, 1971.

Lisca, Peter. *The Wide World of John Steinbeck*. New York: Gordian Press. 1958. RP. 1981.

Nagel, James. *Introduction*. *The Pastures of Heaven*. New York: Penguin Books, 1995.

Pugh, Scott. “Ideals and Inversions in the Pastures of Heaven,” in “Synopses of the Reports of the Annual Seninar 1986, General Subject: ‘John Steinbeck’.” Kyushu American Literature, 28 1987.

Roggenkamp, Karen. “The Short Story Cycle and Western Gothic in *The Pastures of Heaven*.” *The Steinbeck Review*. Vol.4. No.1. Spring 2007.

Steinbeck, Elaine and Robert Wallsten, ed. *Steinbeck: A Life in Letters*. New York: Pen-

guin books, 1975.

Steinbeck, John. *America and Americans and Selected Nonfiction*. ed.Susan Shillinglaw and Jackson J.Benson. New York: Viking, 2002.

———,　*The Long Valley*. New York: Penguin Books. 1995.

———,　*The Pastures of Heaven*. New York: Penguin Books, 1995.

Timmerman, John H. *The Dramatic Landscape of Steinbeck's Short Stories*. Norman:UP of Oklahoma, 1990.

Wyatt, David. *The Fall into Eden: Landscape and Imagination in California*. New York: UP of Cambridge. Rp.1990.

加藤光男「訳者解説」『スタインベック全集第１巻　黄金の杯・天の牧場』濱口脩・加藤光男他訳　大阪，大阪教育図書，2001.

上優二「『天の牧場』における非目的論的思考の展開」『英語英文学研究』第16巻第１号，創価大学英語英文学会，1991.

管啓次郎×小池桂一『野生哲学――アメリカ・インディアンに学ぶ』講談社現代新書，2011.

中島美智子「カリフォルニアのユートピア――スタインベック『天の牧場』から『怒りの葡萄』へ」『エコトピアと環境正義の文学――日米より展望する広島からユッカマウンテンへ』スコット・スロヴィック，伊藤詔子，吉田美津，横田由理編　　京都，晃洋書房，2008.

中山喜代市『スタインベック文学の研究――カリフォルニア時代』吹田，関西大学出版部，1997.

西村千稔「『天の牧場』総合病院――スタインベック文学の源流を求めて」『北海道アメリカ文学』15号，1999.

松本重治　責任編集『世界の名著33　フランクリン，ジェファーソン，ハミルトン，ジェイ，マディソン，トクヴィル』中央公論社，1970.

The Declaration of Independence http://www.archives.gov/exhibits/charters/declaration_transcript.html（accessed August 15, 2015）